

「カミングアウト」の困難 川坂和義

1. はじめに

近年の20年の間に、日本のアクティヴィズムとアカデミズムの両方の領域でセクシュアリティに関する知が爆発的に増加し、洗練されてきた事実を否定できる人はいないだろう。セクシュアリティを巡る様々な言説は、権力や社会制度、文化、身体、ジェンダーなどの知見に変化をもたらし書き換えていった。その過程で、セクシュアリティを語る上で以前なら欠かすことのできなかつた「逸脱」や「倒錯」、「異常性欲」といった概念は、使われることがなくなったか以前と全く異なった文脈と意味で使われるようになってきた。一方、セクシュアリティに関するアカデミックな言説が増えていくにつれ、多様な意味を注入され複雑化していった概念がある。たとえば、「カミングアウト」は、一般的には「本来は隠すべき自分の社会的立場などの属性や体質を自らの意志で他者に伝えること」といった意味だが、この言葉は論者によってそれ以上の意味を担わされることが多々ある。セクシュアリティ学分野では「カミングアウト」は、社会分析や「セクシュアル・マイノリティ」と呼ばれる人々の生活を記述する際に重要な概念として用いられ、それ自身が論争の対象になることが少なからずある。乱暴な言い方をすれば、「カミングアウト」はセクシュアリティ学の論争の中心に居座り続けてきた。

本稿は、日本のセクシュアリティに関する諸言説の中で、「カミングアウト」がいかなる文脈で使われ、どのような意味を付与されているのかを分析し、「カミングアウト」の概念としての有効性と「カミングアウト」をめぐる論争のなかでそれぞれの理論がどのような前提の下で書かれ、そしてどのように解釈されているかを検討することを試みる。ここで断っておかなければならないのは、この論考は「カミングアウト」をめぐる日本の言説を全て網羅し、整理そして精査したうえで、これからの「カミングアウト」の概念自体の可能性と限界を確定することを目指すものではないということだ。ここで取り上げる論文のほとんどは、日本のセクシュアリティをめぐる言説の中では男性同性愛者をめぐるものに限られているし、しかもそれらは代表的、もしくは特徴的なものだとして筆者が恣意的に選んだにすぎない。ここで、私が明らかにしようとしているのは、今までの言説の中で使われてきた「カミングアウト」という概念が、どれほどセクシュアリティや政治を考えたり議論したりするために効果的であったりよき道具として使用可能であるかということであり、「カミングアウト」という言葉を使用したり批判したりするときに、「カミングアウト」にどのような意味が与えられ、いかなる理論的背景のもとにこの言葉が位置づけられているかを分析することである。もちろん、私が想定している意味と文脈以外の仕方でも「カミングアウト」を使用している例が必ずあるだろうし、これ

から間違いなく登場するだろう。この論文は、むしろその可能性を歓迎するために書かれているものである。

2. 「カミングアウト」の多義性

ここではまず、様々な論者による「カミングアウト」という言葉にどのような意味を与えられ、どのような文脈で使われているかを概観する。

キース・ヴィンセント、風間孝、河口和也の『ゲイ・スタディーズ』(1997)は、日本のゲイ・スタディーズにおける「カミングアウト」の学問的および政治的有効性を明確に打ち出し、「カミングアウト」という概念と行為に特権的な意味を与えている点で特徴的である。彼らは、「ゲイ・スタディーズ」を「当事者たるゲイによって担われ、ゲイが自己について考え、よりよく生きることと寄与すること、さらに異性の間の愛情のみに価値を置き、それを至上のものとして同性愛者を差別する社会の意識と構造とを分析することによって、同性愛恐怖・嫌悪と戦っていくのに役立つ学問」(ヴィンセント, 風間 & 河口, 1997, pp. 2-3)と定義し、学問と政治を両立させようとしている。彼らが問題にしている日本の現状ははっきりしており、この著書で試みていることは、同性愛者団体「動くゲイとレズビアンのかい(アカー)」が差別的取り扱いを受けた「府中青年の家」事件によって顕在化した日本のホモフォビアの構造の分析とゲイによる政治を可能にする基盤の理論的構築である。

彼らの「ゲイ・スタディーズ」の定義に明確に見られるように、彼らが試みている「ゲイ・スタディーズ」という学問の政治性とは、ゲイという存在に価値と主体性を与えること、そして異性愛主義的な社会構造を批判的に分析することによって社会変化の機会を提示することである。彼らの重要な論点は、日本の文脈においてゲイ・アイデンティティを肯定し、ゲイを抑圧または肯定的なアイデンティティを疎外する社会構造を分析し、そしてそのような社会構造を当事者によって変化させることができるような理論的根拠をもった政治手法を提示することだ。ここでは、主にキース・ヴィンセントが書いた理論編においてこれらの論点と「カミングアウト」がどのような関係にあると考えられているかに注目する。

ヴィンセントは、「アイデンティティ」を定義する際にアイデンティティとカテゴリーを区別し、カテゴリーはある意味づけを固定する機能をする一方、アイデンティティは具体的な社会的文脈によって意味が変化する政治的なものと主張する。¹「諸々のアイデンティティは具体的な闘争の文脈との関連によってのみ意味を獲得する」(ibid., p. 68)のであり、「ゲイとして理論する過程のなかで、ゲイである意味も変わっていく」(ibid., p. 63)のものである。つまり、「ゲイ」の「アイデンティティ」は、社会の現状とそれを分析する理論、そして政治的な「抵抗」の網目の中で生成される主体として位置づけられている。では、ゲイ理論がすでに急激に受容

され根づきはじめていた90年代の日本において、なぜ彼が主張するような「ゲイ」のアイデンティティ獲得と「ゲイ」による政治が広まらないのだろうか。

ヴィンセントは、日本のゲイ理論とそれに付随するはずのゲイ・アイデンティティの構築を阻害するものとして日本の社会構造を原因だとしている。第一に、ヴィンセントが問題視する日本におけるゲイ理論の問題は、日本の「外」から取り入れられる理論をその成立の背景とする生と政治から引き剥がし、非政治化しながら受容されることである。ヴィンセントは日本が「外」から理論を取り入れるときの学問の脱政治化の作業こそ日本で機能する権力のあり方であると指摘する。

日本において理論は、商品化され消費され、みんなが以前とまったく同じ生活を続けられるように、博物館の一収蔵品として安全に展示されるふうなのだ。理論を博物館の壁の中に囲い込んだままにしておくことは、理論を生と政治から隔離することを意味する。しかし、理論を一種の「展示品」として政治から隔離したとしても、それ自体の行為は中立的で政治と無縁なのだと言うことはできない。それはむしろきわめて政治的な行為である (ibid., p. 70)。

ヴィンセントによれば、このような脱政治化の作業を通して受容された理論家の代表格がミシェル・フーコーである。フーコーによる「解放」を前提とした「抑圧仮説」批判は、日本においては文化的に「被抑圧者」である同性愛者自身の声をかき消すように作用し、同性愛者が当事者として声を発する機会を奪う方向に使われているとヴィンセントは主張する。当事者たちの「抵抗」の産物であるはずの理論が、日本に取り入れられた途端に現状肯定の力学の中で働き始めるとヴィンセントは指摘する。第二に、ヴィンセントはゲイの社会的、政治的アイデンティティを保持することを妨げるものとしてマイノリティのアイデンティティが「日本人」というより大きく確固としたアイデンティティに帰着する点を挙げている(ヴィンセント, 河口 & 田崎, 1995, pp. 26-7; ヴィンセント, 風間 & 河口, 1997, pp. 56-9)。ヴィンセントは、伏見憲明のデレク・ジャーマンについて書いた文章を分析しながら、日本における同性愛者のアイデンティティの問題が「外国」に対する「日本」のアイデンティティの問題に入れ替わりナショナリスティックで排他的な言説に変化する様を見出している。強固でより根源的な民族主義的なアイデンティティが日本人のマイノリティの政治の躓きの石になっているという。

だが、民族主義的なアイデンティティは同性愛者の政治を困難にしているが、ヴィンセントはそれがゲイを抑圧する決定的な要素だとは考えていない。ヴィンセントが本当に批判したいのは、ゲイを排除する社会構造の基礎としての「パブリック」と「プライベート」の区分で

ある。異性愛者のアイデンティティは「プライベート」と「パブリック」の中にきれいに納まり、性的なことは「プライバシー」として保護される一方、「パブリック」では婚姻関係などある関係を社会的に承認される。だが、同性愛者のアイデンティティはすべてが性的なものとして判断されるために、そのアイデンティティ自体が「プライバシー」によって覆い隠され、パートナーなどの関係を「パブリック」に話す機会さえ与えられない。ヴィンセントは、「プライベートなこと」の定義自体が異性愛と同性愛者の間で異なっており、異性愛者にとっては「プライベート」は性的なものを語らない選択を可能にするような特権として働く一方、同性愛者にとっては自らの関係やアイデンティティを語る機会を奪うような働きをするという全く違った機能を持っていると分析する（ヴィンセント、風間 & 河口、1997, pp. 93-4）。彼はこのような異性愛者と同性愛者にとって非対称な「公」と「私」の区別を受け入れている限り、同性愛者はいつまでも「クローゼット」として機能する「プライベート」の中に押し込まれ、同性愛者の公的権利、つまり社会的、政治的に存在することが脅かされたままになると主張する。

このような文化的社会的状況の中でいかに同性愛者がアイデンティティを獲得し、政治的発言が可能になるかということが問題になる。そこで、ヴィンセントが用いるのが「カミングアウト」である。ヴィンセントは、「カミングアウト」をゲイの主体の「形成」の過程として位置づけている（*ibid.*, p. 92）。ヴィンセントの「ゲイ」とは、ホモフォビクな、もしくは異性愛主義的な社会に抵抗する（同性愛的欲望を持った）主体として位置づけられているため、このとき形成される「ゲイ」とは同性愛を排除する社会に抵抗し変化させる可能性を持った政治的主体である。ヴィンセントが「ゲイ」の内容は変化すると述べる時、社会の権力の網目や抵抗の形式が変化するという意味である。

ヴィンセントは、同性愛が犯罪化することがなかった比較的同性愛に「寛容」な日本では、ゲイ男性の場合はクローゼットであることで「男」としての社会的利点を活用することができるが、一旦クローゼットから出ると同性愛と異性愛の差異が露呈するために「ゲイ」の主体の社会的で政治的な形成が始まると論じている。「カミングアウト」とは「必然的に公のものと私的なものとの境界線を再定義することであり、その再定義の過程においてこそゲイの主体というものが出現する」（*ibid.*, p. 95）として、「カミングアウト」を「ゲイ」の主体形成に関しては儀式的であり、社会に関しては政治的なものとして位置づけている。つまり「カミングアウト」とは、ゲイを排除するような公的空間と私的空間の区別の恣意性を暴露し、同性愛者がそこから排除された者として自らを位置づけることによって公/私の区分の再定義を求めることを可能にするような立場を手に入れる手段なのである。

ヴィンセントのこのような説明によって私たちは、『ゲイ・スタディーズ』において「カミングアウト」がゲイの肯定的なアイデンティティを構築し、ゲイを抑圧する社会構造を暴露す

ると同時にそのような社会構造を変化させることができるという彼らが約束した「ゲイ・スタディーズ」の論点を支える最重要概念であることが分かる。ここでは「カミングアウト」は、<主体形成>と<抵抗の政治>を意味している。

しかし伊野真一（2005）は、ヴィンセント／風間／河口が提示するような<主体形成>としての「カミングアウト」の政治を「アイデンティティの政治」だとして批判する。伊野が指摘する「アイデンティティの政治」の問題とは、アイデンティティの外に置かれる者とは異質性を見出し内の者とは同一性を強いること（伊野、2005, p. 43）、アイデンティティそのものが規範になりえること（*ibid.*, p. 45）、カミングアウトによるアイデンティティの政治は「抑圧—解放」型の政治と親和性を持っていること（*ibid.*, p. 61）、カミングアウトの多様性を見逃す可能性（*ibid.*, p. 62）などを挙げている。伊野が問題視しているこれらの問題は、「カミングアウト」とそれによって表象されるアイデンティティの<規範性>であるといえる。ここでは「カミングアウト」はすでに規定され固定化されたアイデンティティに参入する行為を意味し、ヴィンセント／風間／河口が提示するようなゲイに肯定的な「アイデンティティ」を確保する行為から<規範>へと転化している。

また、「カミングアウト」は必ずしもヴィンセント／風間／河口が想定するような政治的な意味合いを帯びるとはかぎらない。金田智之（2003）はゲイ男性とのインタビューから「カミングアウトをしない」状態でありながらも周囲にセクシュアル・マイノリティのセクシュアリティを表出させるような「バレバレ」の状態が存在することを指摘している。金田は、「ある場合においては、カミングアウトを行なうまでもなく、「バレバレ」で済ませてしまうことができ、そして「そのことによって一定の人間関係が維持できるのであれば、カミングアウトは表舞台に登場することはない」と観察している（金田、2003, p. 71）。彼によれば、実際のゲイ男性の生活では「カミングアウト」も「バレバレ」の戦略より親密な人間関係の構築のために用いられていることが多く、セクシュアリティを友人に知らせるかという選択もどのような親密な関係をこれまで構築していったかで決定される。² 金田が指摘しているのは、「カミングアウト」は、必ずしも公的な空間を揺り動かし再定義を迫ることはせず、プライベートなものとして機能しているというのである。ここでは「カミングアウト」は、プライベートな友人関係における<伝達>や全ての人に知らされない自己の「アイデンティティ」の親密な人間関係間の<共有>といった意味で使われている。

このような<伝達>と他者とのアイデンティティの<共有>は、堀江有里（2007）が示唆するように<承認>という政治的課題にもなりえる。³ 承認論において、「アイデンティティ」とは間主観的に形成されるものであり、道徳感情の源泉である（Taylor, 1988; Taylor, 1994/1996; Honneth, 1992/2003）。そのため他者からの歪められたイメージや無視を受けた

状態、つまり歪められた承認 (misrecognition) や未承認を受けた状態は、個人を否定的な状態に押し込めることになる。歪められた承認や未承認は、支配と抑圧の道具になるのである (Neckel, 1991/1999)。承認論において近代社会における政治的原動力は、抑圧されている個人や集団が共同体内の他の構成員と同様の法的権利や尊重を得ようとする自己尊重の感情にあるとする。承認論の枠組みで「カミングアウト」を考えると、セクシュアル・マイノリティによる「カミングアウト」は、このような承認を得ようとする過程として捉えられる。

以上のように、ほんの数年間の「カミングアウト」という言葉の使用例の中には、<主体の形成>、<抵抗の政治>、<規範>、<伝達>、<共有>、<承認>といった相互に同時には相容れない意味が付与されている。これらは、抵抗から規範へ、伝達から承認へと「カミングアウト」をする主体に与えられる意味の強弱によって「カミングアウト」の言葉の定義そのものが変化していつているのである。セクシュアル・マイノリティの政治をめぐる言説の中で、「カミングアウト」の定義そのものが一種のかけ金になっており、多様な議論を生み出しているのである。

だが、明らかにこれらの「カミングアウト」の意味の多義性は混乱を含んでいる。「カミングアウト」をめぐる定義の混乱の一部は、言語をめぐるものである。「カミングアウト」の多様性を論じられるときの多くの根拠は、実社会を観察すると実際にはヴィンセントや風間や河口が想定するような「カミングアウト」のあり方では捉えきれないかたちの「カミングアウト」が存在するというものである (伊野, 2005, pp. 62-3; 金田, 2003, p. 75)。ここで観察されるのは発話行為の多様性であり、たしかに「カミングアウト」の多様な例は言語使用の分だけ見いだされるだろう。しかし、このような指摘は「カミングアウト」の定義そのものを広げるものではない。それらは、イヴ・セジウィックが示唆するような、社会の中で「カミングアウト」という特殊な発話行為を可能とするような「クローゼット」が構成する社会内の構成的規則 (constitutive rule) と発話行為をその場その場で追跡しているにすぎない (Sedgwick, 1990/1999)。⁴ このとき「カミングアウト」の実践の多様性に注目されることによって見逃されるのは、セジウィックが文学を使いながら分析する「クローゼット」の多くの矛盾を含んだ抑圧構造そのものである。一方、ヴィンセント／風間／河口が提示した「カミングアウト」は、発話行為そのものを指すのではない。それはゲイの「主体の形成」の過程であり、たとえば自分がゲイであると気づき認めるといった内省も自己に対する「カミングアウト」として位置づけられる (河口, 1997, p. 190)。ヴィンセント／風間／河口が注目し提示する「カミングアウト」は主体形成の概念であり、それへの批判として伊野や金田が注目する「カミングアウト」は発話行為であるが、一見両者の議論が成立するかのように見えるのは、この両者を厳密に区別す

ることは不可能でかつ互いに重なる要素を多く持っているからである。それゆえに、「カミングアウト」の意味は増殖しながら相互に議論が噛み合わないまま進み続けるのである。

3. 「カミングアウト」と主体

「カミングアウト」をめぐる議論は多くの混乱を生み出しているが、興味深いのは「カミングアウト」と主体の関係性である。「カミングアウト」に<主体の形成>を認めようがそれを批判していようが、「カミングアウト」と主体の関係は注目に値すると思われる。

ヴィンセント、風間、河口の『ゲイ・スタディーズ』において、「カミングアウト」とゲイの主体は重要な関係を与えられているが、「カミングアウト」が結びつける抑圧的社会構造と抵抗的主体の関係の論証は曖昧なままに留まっている。これまでは主体の側面から抑圧的社会構造との関係を概観したが、今度は抑圧的社会からゲイという主体との関係を見てみよう。

ヴィンセントの分析では、社会におけるゲイへの抑圧的構造は「パブリック」と「プライベート」の分割にある。異性愛者にとって現在の「パブリック」と「プライベート」の区分は社会的地位とアイデンティティを守るための権力構造だが、ゲイにとっては「プライベート」と「パブリック」の区分はゲイ男性がジェンダーの特権を得るためにあえて「プライベート」なセックスを政治化するようなことから遠ざける罫である。だが、ヴィンセントの分析からは「パブリック」と「プライベート」の区別がどのように行なわれているのか、そして「カミングアウト」がこれらの区分をいかに変化させるのかについては不明瞭である。まずヴィンセントの分析において、「パブリック」と「プライベート」は二つの定義の間で揺れている。「カミングアウト」が「パブリック」と「プライベート」の区分を再定義するとヴィンセントが述べるとき、社会は間主観的に構成されるものであり全ての構成員が入るべき空間である。よってヴィンセントは、ゲイが「カミングアウト」することによって「異性愛者」が可視化され、異性愛中心主義的に構築された「パブリック」と「プライベート」の区分そのものが再定義することを迫られると主張することができる。だが、「府中青年の家」事件といった現実の日本の分析になると、「パブリック」は「無性 (sex free)」の場となり、女性および性の排除の場として提示される (ヴィンセント, 風間 & 河口, 1997, pp. 114-120)。ヴィンセントが主張するようにこのような女性の排除によって成り立つ「パブリック」は家長的な異性愛主義であり異性愛男性に有利に働くことに他ならないのだが、ここでのヴィンセントの議論では「パブリック」内における性という「プライベート」の要素の排除が問題になっており、「パブリック」を「無私空間」と名づけても良いような性格を与えられている。間主観的な社会であるならば「カミングアウト」は政治的变化を促すものとして意味を持つが、排除をもって機能する「無私空間」としての「パブリック」においては「カミングアウト」は新たな排除対象が可視化されるにすぎない。

ヴィンセントの分析において、「カミングアウト」の政治的効果を強調するときと日本の「パブリック」と「プライベート」そのものを分析するときでは、「パブリック」と「プライベート」の機能そのものが微妙に変化しているのである。このような「パブリック」と「プライベート」の区分の微妙なブレは、「カミングアウト」の政治を理論化する際に常に問題になっている。風間孝は、『ゲイ・スタディーズ』後もフェミニズムの成果を用いながら「パブリック」と「プライベート」の分割がいかに同性愛者を排除し、「カミングアウト」がどのようにそれに再定義を促すかを繰り返し論じている。しかし、「パブリック」と「プライベート」の区分にあまりにこだわるために、「パブリック」と「プライベート」を男／女および異性愛／同性愛という構図として強調してしまっている（風間，1999；風間，2002）。この構図においては、公／私の区分が排除する対象は限定的であるので男性同性愛者の場合はジェンダーでは「パブリック」に置かれるがセクシュアリティでは「プライベート」という秘密の空間に置かれるという公／私の区分の恣意性を暴露する位置を手にすることができるが、女性同性愛者の場合はどちらにしても「プライベート」に置かれてしまいレズビアン「カミングアウト」がより困難な状況を想定してしまう。

このような「カミングアウト」による「パブリック」と「プライベート」の再定義を求める戦略は、「カミングアウト」によって形成される主体がゲイであるとはじめから想定し自明視しているために起こっていると考えられる。「パブリック」と「プライベート」の区分の恣意性の暴露とその変化は、たしかに目標は明確であり、政治的行動としては劇的であり、その効果は革新的である。だが、このような戦略の有効性を認めたとしても「カミングアウト」はゲイが行なえばいいものだろうか。「カミングアウト」による「パブリック」と「プライベート」の再定義を求める政治には、果たして「カミングアウト」の主体は必要だろうか。実際に、彼らの論考では「パブリック」と「プライベート」の定義そのものが同性愛者の排除と解放を約束しているかのようにも読める。ヴィンセントや風間が述べるように、同性愛の排除は、社会通念や公的機関による「パブリック」と「プライベート」の分けによって引き起こされる同性愛者がどのような選択を行なっても不利になるようなジレンマによって行なわれる。そして、「カミングアウト」はその分けの恣意性と抑圧構造を暴露することでこの区分そのものを再定義するよう求める実践であり、「パブリック」と「プライベート」の空間の中に自らが望むかたちか少なくとも不利益が生じないかたちで位置づけられることが目的である。いわば、彼らの「カミングアウト」の政治は、公／私の空間に不利益なく参入することをめぐる政治であり、男性の「同性愛」は現在の公／私の区分からこぼれ落ちた空間を指すひとつの名にすぎない。このことは、すでにヴィンセント自身が示唆している。

クローゼットから「出る」という行為は、率先的な「カミングアウト」であろうと暴力的な「アウトイング」であろうと、たんなる同性愛の主体の「暴露」や「露見」以上のものとなるのである。すなわちそれは、ゲイの主体そのものの社会的で政治的な形成の始まりなのだ。カミングアウトとは必然的に公のものと秘境的なものとの境界線を再定義することであり、その再定義の過程においてこそゲイの主体というものが出現するのである（ヴィンセント，風間 & 河口，1997，p. 95）。

ヴィンセントが上記の文章で「カミングアウト」と「アウトイング」の間に政治的効果の違いを設けていないことは興味深い。それは、同性愛者の意思とは関係なしに同性愛という存在が現実社会で可視化された瞬間に、公／私の境界を揺るがず政治的効果が始まっていると読むことができるのである。そこでは、主体とは関係なく公／私の区分が排除する空間こそが政治的場として浮上してくるのである。

このような「カミングアウト」による公／私の定義をめぐる政治は、ゲイという「主体」を中心に置くことなく行なえる可能性と理論的豊穡さを持ち合わせているにも関わらず、「カミングアウト」の主体を自明で不可欠なものとして想定しているために、アイデンティティの擁護そのものが政治的行為となり、ゲイが革命的存在として美化されているだけではなく政治的主体があまりにも限定されてしまっている。そのために、いかに社会を変化させそのためにどのように働きかけるべきかといった彼らが理論的に練りあげ提出した問いよりも、「ゲイ」のアイデンティティをどれほど自明視することができるか、「ゲイ」はその存在そのものが政治的かどうかといった形而上学的な問いが現在も彼らの議論を参照する者たちに大きな影響を与え続けている。⁵そして、「パブリック」に登場したいという欲望を自明視すると同時に「プライベート」という看過されるべき秘密の次元も再生産するという危険性をも冒してしまっている。だが最も根本的な問題は、風間が岡野八代によるハンナ・アーレントの公的領域と私的領域の議論の読解を参照しながら、「公的領域と私的領域を「分け」する境界線が法であること、その両者は法の前におかれることによって初めて構成されるにもかかわらず、法以前という過去への遡及を誘発することによって、法がもともとあった公的領域と私的領域とを分けしたに過ぎないと理解されてしまうのだ」（風間，1999，p. 7）と述べるような理論的背景の中で、「公的領域」と「私的領域」の脱歴史化された区分に対する批判は可能であったとしても、果たして法の次元である「公的領域」と「私的領域」の区分の問題を固持することは有効かということである。「パブリック」と「プライベート」の分けを問題視するような政治が大きく前進することが困難なのは、現在の公／私の区分を問題視する視線そのものが新たな再定義された公／私の可能性もまた掘り崩すからに他ならない。

しかしここで注目すべきなのは、一方で政治的主体としてゲイを構成しようとすればするほど、その反動として一見するとゲイの主体をかき消そうとする言説を生み出していることである。伊野真一は「脱アイデンティティの政治」という論文において「ゲイ」というアイデンティティでは捉えきれないカテゴリーや自己定義に注目している。伊野は「ゲイ」という同一の名にまとめられる統一的な政治的主体を括弧に入れ、政治的手段としてカテゴリーを用いることを提案している。なぜなら「アイデンティティ」という概念は反証も検証も不可能な存在論的公準であり規範として働きえる一方、カテゴリーは主体が言説によって与えられる社会内の場所であり、言説が作り出すカテゴリーと主体の間には常に落差が生じるためにカテゴリーとの交渉が可能だからだ。伊野は、ジュディス・バトラーのラカンにおける象徴界と主体の関係の読みを参照して、象徴界の呼びかけによる主体化の失敗を主体によるカテゴリーの操作可能性として読み替える。伊野は、「カテゴリーで呼びかけられることによって、呼びかけられた者は言説空間での位置が与えられ」るが、バトラーが述べるように主体の同一化は常に失敗するので、呼びかけられた主体は「そのカテゴリーとの落差は常に生じる」ため「カテゴリーの呪縛から自由にはなれないものの、カテゴリーとの距離を操作しながら自己を語ることができるエイジェンシーを構想する」ことができるという(伊野, 2005, p. 46)。バトラーは、法の呼びかけによる主体化の失敗やズレがエイジェンシーを可能にし、規範の攪乱の可能性が生まれると論じているが、ここに「カテゴリー」と交渉し操作する「自己」という概念を組み入れる点で伊野のバトラー解釈の特徴があらわれるように思われる。伊野はこのように解釈することで、バトラーのエイジェンシーに、言語以前に存在する前言語的な主体と近い性格を持たせている。バトラー自身はこのような象徴界による主体化の失敗とそれでも法に特権的な位置を与え従おうとする理論は法そのものを魅力的にするイデオロギー的な所作に他ならないと主張しているが(Butler, 1990/1999, pp. 111-3)、伊野にとって主体化の失敗はカテゴリーを操作しながら自己を語ることが可能にする政治的可能性なのである。⁶

伊野の「カテゴリーの政治」は「自己」の解放力が基礎になっている点特徴的である。もっと正確に言えば、伊野にとって「政治」的であるというのは、自己を語る際に自己を単純化するような物語化を避け自己をその複雑さのままに語る手段や可能性を有することであり、「真の自己」というものを現実で得ることは信じてはいないにしてもその達成可能性は相変わらず現状の抑圧性をはかる基準になっている(伊野, 2005, pp. 70-1)。伊野にとって「カミングアウト」が表象するアイデンティティが抑圧的なのは、自己を劇的に統一化したり同じ名のアイデンティティによって他者と混同をきたすからに他ならない。「自己」を語ることの解放力や解放すべき「自己」を信じている点では、伊野はヴィンセント／風間／河口よりも熱心な「カ

ミングアウト」の信奉者であり、チャールズ・テイラーが述べるような真正な自己という理想を求める道徳をその理論の根底に据えているのである(Taylor, 1988; Taylor, 1991/2004)。

ヴィンセント／風間／河口の「カミングアウト」と伊野が想定する「カミングアウト」の意味は全く違うが、ここで注目したいのは、一見「カミングアウト」の政治的效果を信じ論点の中心に「カミングアウト」を置いているヴィンセント／風間／河口の場合は社会の中の「カミングアウト」の効果の原因は発話する主体よりも社会の「パブリック」と「プライベート」の配置により大きな重点を置いているという点で「カミングアウト」と主体の関係は理論的なレベルにおいて不安定なままに留まっているのに対し、「カミングアウト」の政治を痛烈に批判している伊野においては「カミングアウト」と主体がより緊密に結ばれ解放されるべき「自己」を想定している事実である。ヴィンセント／風間／河口にとって少なくとも理論のレベルでは社会内の「カミングアウト」の実践において主体は付属的であるが、伊野にとって主体はあまりに貴重であるために「カミングアウト」によって実体化さえもできない。様々な理論の中の「カミングアウト」と主体と社会の関係は、実際に前提にされているよりも不安定で曖昧なのである。さらにミシェル・フーコーの『知への意思』(Foucault, 1976/1986)を参照して「カミングアウト」を解放の物語だと批判する言説まで含めるとこれらの関係はさらに複雑かつ曖昧になる。赤川学(1996)は、「負」とされていたアイデンティティを「カミングアウト」によって「正」の意味に転化しようとする試みは運動論としては興味深い、「こうした戦略が逆に、性のタームによって自己をアイデンティファイするというセクシュアリティの装置の中核にとどまりつづける危険性」があり、「最終的にセクシュアリティの装置の外部に出るためにはたとえそれが肯定的な価値を持つカテゴリーであれ、性のタームで自己同一性を得ることから脱出しなければならない」と述べている(赤川, 1996, p. 132)。このとき赤川が甦らせているのは、アイデンティティと性を切り離すことによって導かれる「セクシュアリティの装置の外部の脱出可能性」というセクシュアリティの解放の物語である。ここでの「セクシュアリティの装置からの脱出」という希望は、フーコーが批判した解放の言説と論理的にはあまり変わらない。法に反して性を率直に語ることで性を解放しようとする試みをフーコーはまさしく語ろうとする欲望こそ権力の効果に他ならないと批判したが、フーコーの批判を用いた「解放の物語」への批判は、語ることが権力の作用ならば性を語ることに固執しなければ権力から抜け出せるという程度のものである。多くの論考で「カミングアウト」を用いた政治が解放の物語に導かれているとみなされているが、実際は「カミングアウト」による「解放」を批判する言説の中にも、「解放の物語」を批判することによって「解放」を夢見るような倒錯したかたちで「解放」は威光を保ち続けているのである。⁷「カミングアウト」を理論のレベルで重視をすると「解放の物語」に酔いしれているとか、「アイデンティティ」を批判すると「カミングアウト」も同様に批判

を行えると考えるのは、自分がどのような立場に位置しているかを示すことを容易にはしているが、残念ながら現実の議論を安易に単純化する以上の成果を得ていないのである。

4. まとめ

「カミングアウト」をめぐる議論は、二重の霧の中で右往左往している。まずは、「カミングアウト」の意味の問題である。「カミングアウト」は様々な文脈の中で矛盾を呑みこみながら多種多様な意味を与えられている。「カミングアウト」の使用例を大まかに分類すると「カミングアウト」を言語行為として捉えてこの言葉を使用しているのと＜主体の形成＞として概念化されて使われるあり方があるのにも関わらず、この違いに留意しないまま議論が行なわれている。さらに、「カミングアウト」と「主体」の関係の問題になると、必ずしも＜主体形成＞として「カミングアウト」を用いているからといって主体を議論の不可避なものとして規定していたり、言語行為として「カミングアウト」を用いているからといって「主体」の問題を回避しているとはかぎらないという興味深い論理構造が見られる。＜主体形成＞として「カミングアウト」を用いているヴィンセント／風間／河口の議論においては、「カミングアウト」が社会に影響を及ぼすとき、「カミングアウト」は必ずしも社会に対して主体そのものを表象せず「ゲイ」は単に政治的变化を試みる存在として主体形成を行なっているにすぎない。それが正当なものだったかは別として、彼らにとって「カミングアウト」はゲイの政治化のために必要であったものであり、ゲイのセクシュアリティを構築し内面化させるフーコーの「告白」ではないのである。一方、伊野の議論になると、「カミングアウト」と「主体」の関係は密接になり、「主体」も解放されるべき潜在的なものとして政治的活動の担保にされている。現在の言説のなかで観察される「カミングアウト」の意味、そして「カミングアウト」と主体の関係は様々な議論の間で極めて複雑に錯綜している。

意味の確定も使用される理論的背景も全く統一されもしない「カミングアウト」のような言葉がセクシュアリティを論じるときに使われ続ける理由は、以下の3つの記述的な利点に求められるかもしれない。

(a) 変化の起点を梓づける

「カミングアウト」はクローゼットと暴露を記述的に梓づける。つまり沈黙と発話、不可視性と可視性、停滞と変化をめぐるゲームを設定することができる。

(b) 行為の主体の明確化

「カミングアウト」はそれ自身が設定するゲームの行為主体を明確に特定することができる。

(c) 抑圧構造の設定

変化をめぐるゲームとその行為主体を設定することによって、それを阻害する働きをする構造そのものを「抑圧構造」として記述することができる。

これらの利点は「カミングアウト」を用いた記述を政治的にするが、不明瞭にもする弱点でもある。私たちが「カミングアウト」を論じるとき、どのような振る舞いが「カミングアウト」であるか、何をもち「政治的行為」とみなし社会の「変化」が起きたと記述することができるのか、「カミングアウト」が可能な主体は誰か、「抑圧構造」とは何かといった論争を少なからず孕むのは、「カミングアウト」という言葉の宿命である。なぜならある文脈に置かれた「カミングアウト」という言葉自体が適及的にこれらを規定するからである。「カミングアウト」の意味、「カミングアウト」と主体の関係、そして「カミングアウト」やその反対論者が描き出す社会における「解放」は、「カミングアウト」という言葉を使う論者の恣意性にあまりに多くが委ねられている。そのために「カミングアウト」そのものが議論の対象になるのである。

おそらくこれからも「カミングアウト」は、セクシュアリティやマイノリティの政治を論じるとき重要な概念のひとつとして用いられるだろうし、「カミングアウト」をめぐる論争は続くだろう。だが、「カミングアウト」は、こだわり続けるには罣が多く、使用するのにはあまりに簡単である。その容易さは「カミングアウト」を批判する者をも魅了する。「カミングアウト」は、批判と擁護の間で、そしてかみ合わない定義のねじれた空間の中でこれからも生き続けるだろう。

Reference

- 赤川学 . (1996). 『性への自由／性からの自由——ポルノグラフィの歴史社会学』. 東京 : 青土社 .
Butler, Judith. (1999). 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 (竹村和子, Trans.). 東京 : 青土社 . = (Original work published 1990). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.
Foucault, Michel. (1974). 『言葉と物』 (渡辺一民 & 佐々木明, Trans.). 東京 : 新潮社 . = (Original work published 1966). *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines*. Paris: Gallimard.
Foucault, Michel. (1986). 『性の歴史 I 知への意思』 (渡辺守章, Trans.). 東京 : 新潮社 . = (Original work published 1976). *Histoire de la sexualité Vol I: La Volonté de savoir*. Paris: Gallimard.
伏見恵明 . (2007). 『欲望問題——人は差別をなくすためだけに生きるのではない』 . 東京 : ポット出版 .
Fraser, Nancy., & Honneth, Axel. (2003). *Redistribution or Recognition? A Political-Philosophical Exchange*. London: Verso.
Honneth, Axel. (2003). 『承認をめぐる闘争 社会的コンフリクトの道徳的文法』 (山本啓 & 直

- 江清隆, Trans.). 東京: 法政大学出版. = (Original work published 1992). *Kampf um Anerkennung. Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*. Suhrkamp Verlag: Frankfurt am Main.
- Honneth, Axel. (2005). 『正義の他者 実践哲学論集』(加藤泰史 & 日暮雅夫 et al., Trans.). 東京: 法政大学出版. = (Original work published 2000). *Das Andere der Gerechtigkeit. Aufsätze zur praktische Philosophie*. Suhrkamp Verlag: Frankfurt am Main.
- 伊野真一. (2005). 「脱アイデンティティの政治」. In 上野千鶴子 (Ed.), 『脱アイデンティティ』 (pp. 43-76). 東京: 勁草書房.
- 金田智. (2003). 「カミングアウト」の選択性をめぐる問題について」. 『社会学論考』, Vol.24, 61-81.
- 河口和也. (1997). 「賢明にゲイになること——主体、抵抗、生の様式」. 『現代思想』, 25(3), 186-194.
- 風間孝. (1999). 「公的領域と私的領域という陥穽——府中青年の青年の家 裁判の分析」. 『解放社会学研究』, 13, 3-25.
- 風間孝. (2002). 「カミングアウトのポリティクス」. 『社会学評論』, Vol.53, No.3, 348-363.
- マリイ, クレア. (2007). 『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション 切りぬける・交渉・談判・掛け合い』. 東京: ひつじ出版.
- Neckel, Sighard. (1999). 『地位と羞恥 社会的不平等の象徴的再生産』(岡原正幸, Trans.). 東京: 法政大学出版. = (Original work published 1991). *Status und Scham*. Campus Verlag GmbH: Frankfurt am Main.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. (1999). 『クローゼットの認識論』(外岡尚美, Trans.). 東京: 青土社. = (Original work published 1990). *Epistemology of the Closet*. Berkley: University of California Press.
- Searle, John R. (1986). 『言語行為——言語哲学への試論』(坂本百台 & 土屋俊, Trans.). 東京: 勁草書房. = (Original work published 1969). *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, Charles. (1989). *Sources of the Self: The Making of Modern Identity*. Cambridge: Harvard University Press.
- Taylor, Charles. (2004). 『〈ほんもの〉という倫理——近代とその不安』(田中智彦, Trans.). 東京: 産業図書. = (Original work published 1991). *Ethics of Authenticity*. Cambridge: Harvard University Press.
- Taylor, Charles. (1996). 「承認をめぐる政治」. In Charles Taylor, 『マルチカルチュラリズム』(佐々木毅, 辻康夫 & 向山恭一, Trans.) (pp. 37-110). 東京: 岩波書店. = (Original work published 1994). *Politics of Recognition*. In Charles Taylor, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*. Princeton: Princeton University press.
- 上野千鶴子. (2005a). 「脱アイデンティティの理論」. In 上野千鶴子 (Ed.), 『脱アイデンティティ』 (pp. 1-41). 東京: 勁草書房.
- 上野千鶴子. (2005b). 「脱アイデンティティの戦略」. In 上野千鶴子 (Ed.), 『脱アイデンティティ』 (pp. 289-321). 東京: 勁草書房.
- ヴィンセント, キース., 河口和也., & 田崎英明. (1995). 「<ゲイ・スタディ>の可能性」. 『イマージュ』, Vol.6-12, 22-43.
- ヴィンセント, キース., 風間孝., & 河口和也. (1997). 『ゲイ・スタディーズ』. 東京: 青土社.

Footnote

- ¹ アイデンティティを得ることがヴィンセントにとっての政治的抵抗である一方、アイデンティティから抜け出すことが政治的抵抗であるとする点で最終的な結論と政治的態度は対極であるが、アイデンティティに関する同様の見解は、上野千鶴子に見られる(上野, 2005a, pp. 35-6; 上野, 2005b, pp. 318-9).
- ² 金田が指摘するような「バレバレ」の状況によるセクシュアリティの表出という行為は、クレア・マリイが「ネゴシエーション」として概念化しているものとして考えることができる。「ネゴシエーション」(切り抜ける行為・交渉・談判・掛け合い)とは、発話者同士の双方向的な行為であり、発話者が社会的規範や制約に配慮しながら自発的に言葉を操作し、発話者の主体を形成したり、社会の制約された状況の中で主体の存在が可能となるような場所を確保するような発話者の自発的もしくは意識的な行為である(マリイ, 2007).
- ³ これは、2007年6月10日に行なわれた『日本女性学会』の研究会で発表された堀江有里の個人発表「レズビアン自己表象と承認をめぐる一カミングアウトに関する一考察」に示唆を受け参考になっているが、彼女のレジュメや発表からの直接の引用は行なわない。「承認」についてはTaylor (1994/1996)、Honneth (1992/2003; 2000/2005)を、そして「承認」のジェンダー・セクシュアリティへの適用の問題はFraser and Honneth (2003)を参照している。また、ヴィンセント/風間/河口の『ゲイ・スタディーズ』も<承認>が概念化され前面に問題として出てくることはないが、<承認>を潜在的な政治的原動力として用いていると考えられるためにここで独立して取り上げることは不適切かもしれないという可能性を多分に含んでいる点も留意されたい。
- ⁴ ジョン・サールの区分に従えば、セジウィックが分析するような「クローゼット」は「既存の行動形態をそれに先行して、またそれとは独立にそれを統制する」という「統制的規則(regulative rule)」として位置づけるほうが適切かもしれないが、ここでは「カミングアウト」という行為の創造性と特殊性に注目して、「構成的規則」と述べている。発話の意味と規則の関係に関して、ジョン・サールの『言語行為』を参照(Searle, 1969/1986, pp. 58-87)。
- ⁵ 伏見憲明の『欲望問題』(2007)もこのような問題意識から書かれている。伏見の意図は、「アイデンティティ」と「政治」の短絡的な結びつきを断ち切り、「アイデンティティ」に広がりを与えることである。だが、伏見の主張は、政治性を与えられてきた「ゲイ・アイデンティティ」から政治性を切り取り、「アイデンティティ」ではなく「欲望」の実現要求こそが社会変化の原動力だと主張することで、「欲望」それ自体や「欲望」によって構築された「アイデンティティ」そのものが政治的だと示唆するような伏見自身が批判するようなこれまでの「アイデンティティの政治」を政治の猥雑さと表象=代表の主体の正当性の問題を引き受けなかつたかたで反復しているにすぎない。
- ⁶ 私の理解では、バトラーの理論では、主体は法による呼びかけによって形成され言葉を離れて主体は固有の存在を保つことはできないので、言語やカテゴリーと交渉可能な主体を想定することはない。もちろん、権力への抵抗や他者に承認を求める過程で、既存の言語に依存しながら自分で自分自身に名づける「名乗り」という他者との交渉のかたちは認められるが。伊野が主張する「カテゴリーの政治」には、言語では決して現出しえない真正な「自己」という政治を動機づけるものと共に、自己を十全に表象できる完全な言語への未練を見出すこ

とができるのではないだろうか。例えば、彼はこのように語っている。「カテゴリーとの交渉を行い、カテゴリーに規定されながらもそれを超える語りを模索し、カテゴリーの意味内容を書き換えていく。そのような可能性をクリア理論から読み取るべきではないか」（伊野，2005, p. 70）。伊野の完全な言語や語りへの未練こそが、バトラーのように主体化の失敗そのものを肯定するのではなく、カテゴリーと交渉し自己を語ろうとする方向に向かわせているのではないだろうか。私個人は、主体はカテゴリーと交渉しえるような位置を得ることができるのか、カテゴリーを越えた語りの模索が有効な政治的アプローチになるかは懐疑的である。おそらく、抑圧のあり方とそれへの抵抗としての「語り」がどのように位置づけられるかをより慎重に検証しなければならないだろう。

⁷このような倒錯した「解放」の希望は、思考する主体が意識的に達成することが可能かどうかは不明瞭にされているが、「身体と快楽」という抵抗の拠点を明示されたかたちでたしかにフーコーの著作の中にも見られる。このときフーコーは権力の問題とセクシュアリティの解放の問題の間で躊躇しているように思われる。フーコーは「セクシュアリティ」を西洋近代に生まれた「規律権力」と「生権力」という法や主権の概念では捉えられない権力の作用を記述するために注目しており、このときフーコーは安易な解放を拒絶して冷徹な眼差しで権力を分析している。だが、同時にこの著作にはアジアの「性愛の術」への言及などセクシュアリティの出現によって西洋社会が失ってしまった快楽へのノスタルジアが見られる。『性の歴史』の続巻で根源的な「快楽」への接近可能性というノスタルジアは修正されているが、このような喪失した対象へのノスタルジアはフーコー自身が『言葉と物』（1966/1974）で批判した「人間学的眠り」に誘う人文科学の「起源」への不可能な探究に他ならない。皮肉なことに、『知への意思』がこれほどまでに影響力を持ち続けているのは、喪失した「快楽」へのノスタルジアという魅力のせいではないだろうか。

The Problems of Coming-Out Kazuyoshi KAWASAKA

This paper examines the meanings inherent in the term “coming-out” and the contexts in which it is used in current discourses regarding sexuality in Japan, based on a critical reading of several texts by different authors. It attempts to analyze the underlying assumptions upon which the many diverse arguments are based, as well as the validity of “coming-out” itself as a concept.

Interestingly, “coming-out” has given rise to numerous debates, despite the inconsistency of its usage, that is, the connotations of the term seem to vary according to the writer. For example, one writer who examines the relationship between the subject and “coming-out” strongly emphasizes the process of subjectivation arising from “coming-out,” but accords the subject an ambiguous status on a theoretical level. In another text, the liberation of the subject is the focal point of the argument and yet, at the same time, the notion of identity is also criticized.

The meaning of “coming-out,” the relationship of “coming-out” and the subject, and the “liberation” in a society composed of “coming-out” proponents and opponents, all appear to depend upon the arbitrariness of the writers themselves who use the term. Thus, this paper argues that the concept of “coming-out” itself has become the focus of debate.

Keywords: homosexuals, coming-out

